

1 基本的判断

創立より半世紀近くを経た大学キャンパスは、美しい緑豊かな空間に育っている。これは、変化に富む地形に応じ、見事に建物を配置設計した吉村順三の基本計画によるものであり、これを継承し更に強化発展させていくことが、今後の施設整備の基本理念であることに疑念の余地はない。キャンパスの美しさを保ち、更に高めていくためには、現存する建築の良さを正しく理解し尊重した上で、今日新たに建築に求められている諸条件、(耐震性、バリアフリー化、省エネルギー化等)を満足させつつ、将来に向けて生きて使われる空間として更新していかねばならない。そのために現時点で考慮すべきと思われる問題点を簡潔に述べる。

2 創立時建設の建物全体に共通な諸問題

a) 構造強度について

打放しコンクリートの仕上げは、全般的に見て、今日でも美しい表情は保たれていると言えよう。しかし、鉄筋がさびてすでに表面に露出している箇所もいくつか見受けられる。建物毎の構造強度を判定するためには、現在のコンクリート強度、内部の鉄筋の状態について、テスト・ピースを採取して調べた上で、強度計算を行わなければ判断できない。早急な構造診断が必要である。診断の結果、構造的に耐震補強をする必要があるとなった場合には、美しい形態を損なわず、望むらくは更に高めるような、熟達したデザイン能力が求められる。

b) 屋根・天井について

漏水が多く、箇所で発生している。複雑な形状の屋根面を防水するために、シート防水、塗布防水等が繰り返し行われてきているが、完全に止水するに至っていないようである。

また屋根天井面での断熱も不十分で、室内への伝導・輻射による熱貫入が多である。漏水を止め、断熱性を高めるための方法としては、現状の屋根面の上に、空気層をとった上で、もう一枚の新しい屋根を置く方法が考えられる。現状の複雑な屋根形状を防水するためには、シート防水等では限界があるので、この方法なら効果は大きいであろう。屋根と天井の間に間隙をとることによって、断熱性を高めることにもつながる。

現状の建物の美しさを害はないためには、新しい屋根を薄く軽快につくる工夫が求められよう。

c) 壁・窓サッシについて

ひび割れ等があちこちで発生している。そこからの漏水も見受けられる。建物の構造的歪みや、熱膨張による変形に起因するものと考えられる。

断熱が充分でなく、室内環境は快適さが保たれていない。

壁については、外側に断熱層を設けた上で、新しい外壁で包むことが効果あると考えられる。窓サッシについては、建物の主要な表情をつくっている場合においては、内側に新たなガラス面を二重被膜として設置することも考えられよう。

3 各建物固有の問題

a) 講義棟

キャンパスの中央を走るこの細長い建物は、キャンパスの空間の骨格であり、愛知芸大の理念の中心でもあるので、その形態の保全に全力を注ぐべきである。

構造的問題については2・aで述べたとおりで、この建築を美しく支えている1階の列柱（ピロティ）を構造補強する必要がある場合には、特に十分なデザインの考慮が求められる。

平面計画上の問題として先ず挙げなければならないことは、今日建築に求められている身障者のためのバリアフリーをいかに実現するかという点である。三階の講義室には、それぞれの階段から直接に達する平面となっているため、廊下がない。もしもこのままエレベーターを付設するとすると、エレベーターは三つ必要なことになり、かつ建物の外部にエレベーター塔を建てることになり、建物外観を大きく害うことになる。またこの規模の建物に三基のエレベーターを設置することはあまりにも過剰である。考えられるひとつの解決は、建物中央のどこかに一基エレベーターを新設し、三階は大きくひとつの空間（あるいはエレベーター両側の二つの空間）として利用できるような平面を考えることである。その時には、たとえば、三階は大きく事務管理棟として一体として使うことも考えられよう。

b) 奏楽堂

この建物も、前記の講義棟と呼応しつつ、キャンパスの中央広場をつくり上げている中心的な建物であるので、その形態構成を大切にしつつ保存再生を行う必要がある。漏水が大きな問題として長年指摘されているようであるが、そのひとつの解決方法は2・a)で述べたとおりである。断熱そして外部騒音の遮音も不十分である。これについては、2・b)、2・c)で述べたことで対応できよう。

内部の音響については、音楽演奏に必要な条件が満たされていないことも指摘されている。内部の壁や天井の形態と素材の修正である程度の改良は可能であろうが、そもそも、座席数に対して空間全体の気積（エア・ボリューム）が不足しているかもしれ

ない。しかし建物の外形を保つ方針をとる以上気積を大きくすることは不可能である。それならばこの建物空間形状にふさわしい用途、たとえば長い残響を必要としない式典や講演会、シンポジウム等を主目的とした講堂、大講義室として整備することが考えられよう。

c) 音楽学部棟

中廊下をはさんで両側に連なる個人練習室群においては、各部屋の音が廊下から各部屋に筒抜けになっていて、音楽練習室の基本が満たされていない。又個々の部屋の面積、天井高も不十分である。これらの問題は、この建物の基本形から生じているものであって、その形を保つ限り、改善する方策は、私には、考えられない。すなわち新たな建物を作る以外にないと考えられる。

この建物を保存したとして、別な利用方法は考えられるであろうか。そのような卓抜な利用方法が着想されることが望まれるが、今のところ私には思い浮かばない。

a) 美術学部棟

雨漏り、断熱の問題とその解決については1. で述べたとおりである。

中庭や解放廊下を随所に配した平面構成は将来共、魅力的で有効な空間として存続していこう。構造的には「デザイン棟」の長大な壁と、その上に反復して架構されているRC折版の構造には、耐力の不足が感ぜられる。これについては、出来るだけ早く、十分な構造診断を行い対応する必要がある。

4 外部空間全般について

アプローチ道路、広場、庭園全般は当初の計画が今日でも生きていて美しく魅力的である。建物保存と共にこれら外部空間も大切にしていきたい。緑は豊かである。地形も魅力的な変化に富んでいる。しかし、樹木は、この数十年間ほとんど手を加えられず、伸び放題、茂り放題になって密生状態になり、本来の地形の伸びやかさが見えなくなっている。低木（特に実生の雑木）は大きく伐採し、茂りすぎた大木の大枝も刈り込んで、敷地全体に見通しと風通しをよくするならば、キャンパス全体は活発で魅力ある力を回復するであろう。特に外部空間で、閉鎖的な感じが与えられるのは、アプローチ道路を登って、管理棟と金堂壁画描写展示館前に到達したときである。ここは現在無性格な駐車場となっていて、その前面は密林で閉ざされている。ここにキャンパスの入口広場としての明るさと活気をつくり出し、そこからその前方の斜面の緑、流れ、池につながる大きい展望が再生されるならば、このキャンパス本来の魅力を更に強めることになるだろう。

以上